

ちちやく

なった俺の
異世界攻略

ちくわ ill. SAIPACo.



レオナルド

落ちこぼれの
ハイエルフ。ダイキに
振り回されがち。

クロウ

闇の大精霊。
精霊随一の
良識人。

アクア

水の大精霊。
ダイキの
過激ファン。

クロス

最強の精霊王。
ダイキの
保護者1号。

登場人物紹介

ダイキ

神様のミスでちっちゃく
なって異世界に転移
した少年。天真爛漫で
いじっぱりでちょっぴり
泣き虫。

シル

ダイキが拾った
「ちょっつよい
ワンコ」。



目が覚めると俺は一面真っ白な場所にいた。

「あれ……？ おれ、こんなばしょ、しらないぞ？」

おかしい。なんか俺の声が高くなってる。まるで声変わりする前のよう……

「すまないね。君には異世界へ行ってもらおうよ」

……？ なんか声がする。

「ああ、まだ姿を作っていないかったね。……ほら、これで見えるかな？」

突然目の前に美丈夫が現れた。その人は透き通るような目をしていて、手には不思議な懐中時計を持っていた。

「……なんかおかしなひと、あらわれたな」

俺がポカーンとしながらそう言うと、目の前の人はショックを受けた顔をした。

「え……。私はこの姿を結構気に入っているんだけど……そんなにおかしく見えるかな」

「うん。すごいみえるね。おれ、いままでそんなめをしているひと、みたことないもん。それに……いまだきかいちゅうどけいなんて、もってないよ」

俺がそう言うと、その人は何故か笑いながら俺の頭を撫でた。

……ん？ 撫でた？

「そんな率直な物言いを聞くなんて何年ぶりかな？　ますます気になるね……うん、それにこれほどまでの素質。やっぱり君には異世界へ渡ってほしいな」

……異世界？　さっきからこの不思議な人は、「異世界」って言ってるけど、どういうことなんだ？

「まあ、そう思うよね。君には異世界へ渡ってもらって、その世界を豊かにしてほしいんだよ」
ん？　……は!?　もしかして心が読めるのか!?

「私は一応神様だよ。人の心も読めないんじゃない、それはもはや神の名を騙る詐欺師だよ」

……まじか。神が実在するなんて信じられないや。今も半分信じてないけど。

てゆうか、お祖母ちゃんが怪しい人には近づくなかって言ってたし。

俺がそろそろと距離を取ると神様(?)は慌てたように喋り始めた。

「あ！　ほら、異世界に行ってくれらるならバランスが崩れない程度のアイテムとかあげられるし、それに、えーっと……本！　今なら、原初の魔導書もあげちゃう大サービスをするよ！　どう？

剣と魔法の異世界に行きたくなかった？」

「うーん……グリモアというものにはきょうみがある……けどいやですな」

俺は流行りの異世界になんて行きたくない。確かに冒険とか心躍るものがあるけど、現実には絶対に違うはず。まず剣と魔法の世界は文明が遅れてるだろう。文明の利器に慣れてる俺が自力で生活できるとは思えないな。

何より飯。男子高校生の俺はどれだけ食べても少しすれば腹が空くのだ。そんな中でラーメンとかポテチがないと死んでしまう。

俺がそんなことをつらつら頭の中で考えていると、それを読み取ったのか、神様はウムウム頷きながらニコニコ顔で提案してきた。

「なら君には地球の調味料一式をプレゼントするよ。流石に食べ物全てなんてことにしたら、神々の協定に違反しちゃうからね。君はお祖母さんと二人暮らしだったから、確か料理はできるよね」

俺の両親は小さい頃に飛行機の事故で死んでしまった。

両親の記憶なんてないから凄く悲しいことはなかったけど、お祖母ちゃんは俺が物心ついてからも暫く落ち込んでたっけ。

お祖母ちゃんに育てられた俺は和食の調理ができるし、洋食もそれなりに作ることができる。

「それから、君は異世界に行ったらなんの職に就きたいのかな？」

「それはもう、ぼうけんしゃ」

「それなら冒険者セットをあげようじゃないか。一応私ができる物だから、性能はトップクラスのはずだよ。どうかな？　異世界に行かない？」

そこまで言われたら少し迷っちゃうな……俺の元の世界への未練はお祖母ちゃんだけだけど、そのお祖母ちゃんは去年死んじゃったし。

「うん！ じゃあ今回は拉致みたいな形になっちゃったし、大サービスでお祖母さんと一回だけ話せるようにしてあげる。違反ギリギリのラインだけど、心の整理ができると思うからね」

お祖母ちゃんとまた会えるのか？

……一回だけでいいから、会えるなら会いたいよ。

「かみさま。おれをおばあちゃんにあわせてください。いせかいにいくかは、おばあちゃんときめます」

「……うん。分かったよ。それじゃあ君のお祖母さんを召喚するよ。制限時間は五分。それと、お祖母さんには接触することはできないよ」

制限時間が短いから何を言うか決めないと。

「……これかな。……ほら、君のお祖母さんの魂だよ」

神様が渡してきた輝く何かは、凄く懐かしい気配がした。

……お祖母ちゃんだ。

少し厳しくも愛情を込めて育ててくれたお祖母ちゃんの気配に、俺は泣きそうになった。

「久しぶりだね大輝。私がいなくても元気にしてたかい？ しつかりご飯は食べてる？ 学校の勉強はサボってないでしょうね」

……やつぱりお祖母ちゃんだ。こんなときなのに最初に言うことが小言なのは、お祖母ちゃんしかいない。

お陰で今にも溢れそうだった涙がすっかり引つ込んでしまった。

「つ……うん！ おばあちゃんがいなくてもおれ、しつかりやってたよ！」

「そうかい。それは安心したよ。まだ高校生のお前を一人にして大丈夫か心配だったんだ。元気にやっているなら嬉しい限りだ。何故今、お前と話せているのか分からないけど、とにかく神様には感謝しなくちゃね」

生前と全く変わらない様子でのんびりと喋っているお祖母ちゃんに俺は言った。

「……とつぜんなんだけど、おばあちゃん。おれ、かみさまに、いせかいにこないかっついていわれて。……どうしたらいいのかわからなくて、おばあちゃんを、よんでもらったんだよ」

俺がお祖母ちゃんに今までの出来事を伝えて助けを求めると、お祖母ちゃんの反応は意外なものだった。

「そんなくだらないことをうじうじ考えてたのかい」

「そんなことって……」

「そんなことだよ。行こうか迷っている時点で、行きたいという心があるじゃないか。ただ地球から別の場所にお引っ越しするようなんだろう？ ……それにね。もうお前は大きいんだし、自分で決められるはずだ。何よりこれはお前の人生なんだからね。……まあ、今はちっちゃくなっていくようにだけ。……可愛い」

……そうだ。迷って決められないんじゃないやなくて、お祖母ちゃんと今まで積み上げてきた物がなく

なってしまうことが怖かったんだ。

これまでしてきた勉強やお祖母ちゃんが応援してくれたこと。その全てが白紙になってしまうことが俺を躊躇ちゅうちゆさせていたんだ。

それと、お祖母ちゃん、最後にぼそつとなんか言ってた……ちゃんとは聞こえなかったけど、きつと俺が心配で仕方がないんだろう。

「……ありがとう、おばあちゃん。おれ、きめた。おれ……」

第一章 精霊編

第一話 事前準備

「おれ……いせかいにくよ」

「……そうかい。お前がそうしたいなら、そうすればいいさ」

そう言ったお祖母ちゃんの魂が段々と弱まってきている。あとちょっとしか話せないことがお祖母ちゃんにも分かったのか、少し早口で喋り始めた。

「そろそろ時間が迫ってきたね。私が言えることは多くないけれど、最後にこれだけは聞いてちょうだいな」

「……なに？ おばあちゃん、いつてみて」

俺は最後になるお祖母ちゃんの言葉を聞こうと耳を傾けた。

「……これから異世界に行くんだから何があっても大丈夫なようにしなさい。神様から搾り取れるだけ搾り取ってやりなさい。じゃあ大輝。これからも頑張りなよ」

そう言って消えたお祖母ちゃんのいた辺りをポカーンと見つめながら、俺は苦笑いをした。

「……やっぱりうちのおばあちゃんだ」

俺がポツリと呟くと少し離れたところにいた神様が戻ってきた。

「お祖母さんとも話せたことだし君の決意を聞かせてくれ」

何やらウキウキした様子の神様に俺は笑顔で返事をした。

「かみさまありがとう。おれ、いせかい、いくことにするよ！」

「ありがとう！ 君ならそう言うってくれると思っただよ！ じゃあ早速……」

「でも！ いせかいにいくのに、ほんがひとつだけなんてけちすぎるぞ！ もっとせいぎゆうする！」

異世界で何かあるか分かったもんじゃない。念には念を入れておこう。それにお祖母ちゃんの最後の言葉に俺は応えたいし。

「あ、あれ…？ 魔導書^{マジモブ}って価値が付けられないくらい貴重な、世界に一つしかないものなんだけど……君にとっては『本一つ』でしかないのかー」

「せかいになんこあるうが、おれにはしょぼくみえるんだ！ もっとカッコいいけんとか……まほうのつえとか……そういうのがほしい！」

俺がわーわー抗議すると神様は渋々了承してくれた。

「……仕方ない。確かに少しちっちゃくなつた君を、本一つ渡して放り出すのは酷かもしれないね。世界の均衡^{きんこう}が崩れない程度のもならあげるから、言ってごらん？」

ちよつと待て……少しちっちゃくなつた？

え、どゆこと？

「ちっちゃくなつた、つてなに？」

俺が問いかけると、神様がタラタラと汗をかきながら話し始めた。

「……君をここに連れてくるときに、あつちの世界の神から邪魔をされてね。バレないように君の気配を小さくしたんだよ。その影響で少し若返っちゃってる……大丈夫だよ！ 君ならなんとかするって！」

何が「なんとかなる」だ！ 全然良くないわ！ なんか声が高いし、手も小さいなって思ってたら、そういうことだったのかよ！

プリンスカ腕を組んで怒っていると、神様が焦^{あせ}つたようにご機嫌取りを始めた。

「ほ、ほら！ 異世界へ行けるんだから機嫌直して？ それに少し若返っちゃっただけだよ！」

なーにが少し若返っただけだ！ ここまで若返ったら不便のほうが多いだろ！ やるなら丁度いい年齢に若返らせろよ！

「ゆるしません！ おれ、いちどきめたら、まげないおとこなんだ！」

「え……君、そんな熱血男じゃないでしょ。……仕方ない。ほら、これあげるから許して？」

そう言っつて神様を取り出したのはナイフだった。稲妻^{いなずま}をまどつている、ゲームに出てくるような凄く格好良いやつだ。

「……ま、まあ、おれ、やさしいからゆるしてやっても……」

俺は心が広いので神様を許してあげようとした。

……別にナイフが欲しいからじゃないんだよ！

「ありがとう！ これで許してくれるなんて……なんてチョロいんだ」

ん？ 神様がなんか言ってるけどよく聞こえなかったな。まあ俺の心の広さに感動でもしてたらんだろうな。

「じゃあ君に餞別せんべつをあげる。まずはこのナイフ。そして魔導書グリモアでしょ……それだけだと不満だろうから冒険者セットも付けて……あとこれもあげようかな」

神様がブツブツ呟つぶやいていろいろな物を小さなポシェットに入れていく。

どうやら、見た目以上に物が入る、魔法のポシェットみたいだ。

「……うん！ これでよし！ はいこれ。異世界でも頑張ってるね」

突然俺の足元に大きな魔法陣みたいなものが現れた。

俺がびっくりしていると少しずつ周りが光り始める。

「君に多くの幸運が訪れることを祈ってるよ……最後に私の名を覚えてあげるね。私の名は……時空神クロノス」

次の瞬間、俺は異世界に飛ばされた。



大輝が異世界に行って少し経った頃。

「……ほら、約束は果たしたよ。アリエル」

「そうかい。私の可愛い孫なんだよ。もし異世界で何かあったら殴なぐり殺してやる」

クロノスと、再び姿を現した大輝の祖母——アリエルが淡々と言葉を交わす。

「……何故あの子の姿を戻してあげなかったんだい？ 時間と空間を司つかさどる神なら造作もないことだろう」

アリエルがクロノスに問いかけると、彼は少し間をおいて重々しく話し出した。

「私があの子の姿を戻さなかったのは直感だよ。それに……驚いたことにあの子には魔法神ヘカテの血が混じっている。子供の姿にすることで力を抑制したほうがいいだろう」

「……どうということかい？ 私達の家系に他の神の血なんて流れていなかったはずだ。……まさか」

「うん。私もそう思ってるよ。ていうかそれ以外に可能性があるとは思えない」

「……。そういうことか。分かったよ」

「任せて。あの子の子供だ。今度こそ守ってみせるから」

今度こそ完全に消えたアリエルに時空神は誓った。



「……うーむ、ここはいつたいたどこだ？」

俺はしゃがみこんで、目の前にいる蝶々さんに声をかけるけど、もちろん勿論返事はない。

……俺、そういえば神様にどこに転移するのかが聞いてなかった。

これはまずい。俺は今完全に子供なのだ。高校生のときとは違って有り余る体力なんてないし、これから一人で暮らせるのかさえ怪しいな。

「うーん、どうすれば……あ！ そういえば、かみさまにいろいろもらったんだ！」

もっと欲しいとねだったり、神様がご機嫌取りのためにくれたりで、数々の物が入ってるはずだ。俺は腰にあるポシエツトから、色んな物を取り出した。

「これはズボンで……これはすいとうでしょ……これは……ネックレシュかなー？」

整理すると、服三着、フード付きマントに水筒にお弁当箱、ルービックキューブみたいな謎の物体、綺麗なボールペン、謎の瓶びん、あのナイフに、装飾が施された分厚い本が入っていた。これが神様の言つた魔導書グリモアつてやつかも。さらに良く分からないネックレスがあった。

あ……あ……あ……この魔法のポシエツトもある。

「とりあえず……ふくはもどして、すいとうとおべんとうばこ、しかくいのもいらないな。それにペンとビンも……いちおうネックレシュとナイフは、もっておこー」

今使わないものはポシエツトに戻し、使えそうなものは身につけた。残ったのは魔導書グリモアとかいう本だけ。
とりあえず読めるか調べようか。

「うーん……ぜんべいはくしだ」

本を開くと驚いたことになんにも書かれていなかった。あの神様が適当なものを渡したのかも……いや、流石にそれはないか。

本を持ったままどうしたものかと思っていると、ヒラヒラとあの蝶々さんが舞いはじめた。

その光景が美しくてじーっと見ていた俺は、蝶々さんを描くことにした。

だってボールペンあるし。白紙の分厚い本もあるし。スマホがないなら、書くしかないでしょ。異世界ということもあってか、少し幻想的な光景を残そうと俺はボールペンを取り出し本を開いた。

「……え？」

本を開くと白紙だった場所に文字が書かれていた。

【精霊蝶】

主に神秘の森に生息している精霊の魔力残滓ざんしによって誕生した魔法生物。微かな魔力かすを有しており、また精霊の近くでしか生息できないので、見つけたら縁起が良いといわれている。

る。

……もしかしてこの蝶々さんって精霊蝶っていう生き物なのか？

「フム……とりあえず、なんでもじがあらわれたのかはおいとして、これはせいれいちょうだな。ほんにかいてあるえとそっくりだし……もしかしてこのほんって、おれに、しりたいことをおしえてくれるのか？」

……試してみるか。

俺は一旦本を閉じると、手に持っているボールペンを頭に浮かべながら本を開いた。

【神贈…魔法ペン】

時空神によって創造され贈られたアイテム。魔導書専用のペンであり魔力を対価として使うことで半永久的に使用可能。

また、魔法ペンで書いたものは言語の枠から逸脱した力を持つ。

……ほんとは出てきちゃった。

凄い。これがあればなんでも分かるじゃないの。

俺はポシエットから次々に取り出して調べていった。

【神贈…時空神の冒険者道具】

時空神によって創造され贈られたアイテム。弁当箱、水筒、冒険者服一式、収納型簡易天幕。

弁当箱、水筒には時間停止の権能が付与されており、冒険者服一式には時空神から空間隔絶領域術が施されている。

【神贈…神秘の首飾り】

時空神によって創造され贈られたアイテム。時空神によって情報は秘匿されている。

【神贈…幻の魔法瓶】

時空神によって創造され贈られたアイテム。持ち主の記憶にある調味料を好きなだけ出すことができる幻の瓶。

【神贈…魔法のポシエット】

時空神によって創造され贈られたアイテム。神話級空間拡張魔法が施されていて、家一軒分に匹敵する容量を収納することができる。

ポシエットに入らない物を入れることはできない。

【神月・創滅のナイフ】

創世神話における原初のアイテム。絶対切断の力を有し、極めた者は世界の理さえ切ることができる。

ナイフへの無制限魔法付与が可能。

【神々の結晶・魔導書】

様々な神々が協力して作り上げた世界最高峰のアイテム。あらゆる知識を閲覧することができ、制作者以外のあらゆる者達は干渉権を行使することができない。

また、魔法媒介を可能とする。

……魔導書って凄いやつだったんだな。

まず冒険者道具一式はあの神様の作ってくれたやつで、四角いのはテントだったらしい。

俺の手に収まるくらい小さくなるテントって凄いね。

空間隔絶領域とかは分からないので放置して、ネックレスも情報が見られないからどうしようもないな。

俺が一番ビックリしたのはポシェット。家一軒分入るなんて凄い。ポシェットの入口より大きい

物はいれられないみたいだけどそれでも便利だ。

これはずつと使えるように大切に使うことにしよう。

瓶は神様から事前に聞いていたからいいとして……

ナイフはヤバイ。うん、ヤバイね。一旦見なかったことにしようか。

そして最後の魔導書だけ……神々の結晶って何。てか俺が持つてていいやつなの？

全ての知識を閲覧できるとか、もはや元の世界の有名検索サイトの完全上位版じゃん。

なんか凄いもの沢山貰っちゃった気が……

オロオロしていると、いつの間にか日が結構傾いていることに気づいた。

あと二、三時間後には日が沈みそうだ。

「……とりあえずきょうの、きよてんをみつけよーか」

俺は一旦アイテムのことは頭から追い出して拠点探しを始めた。

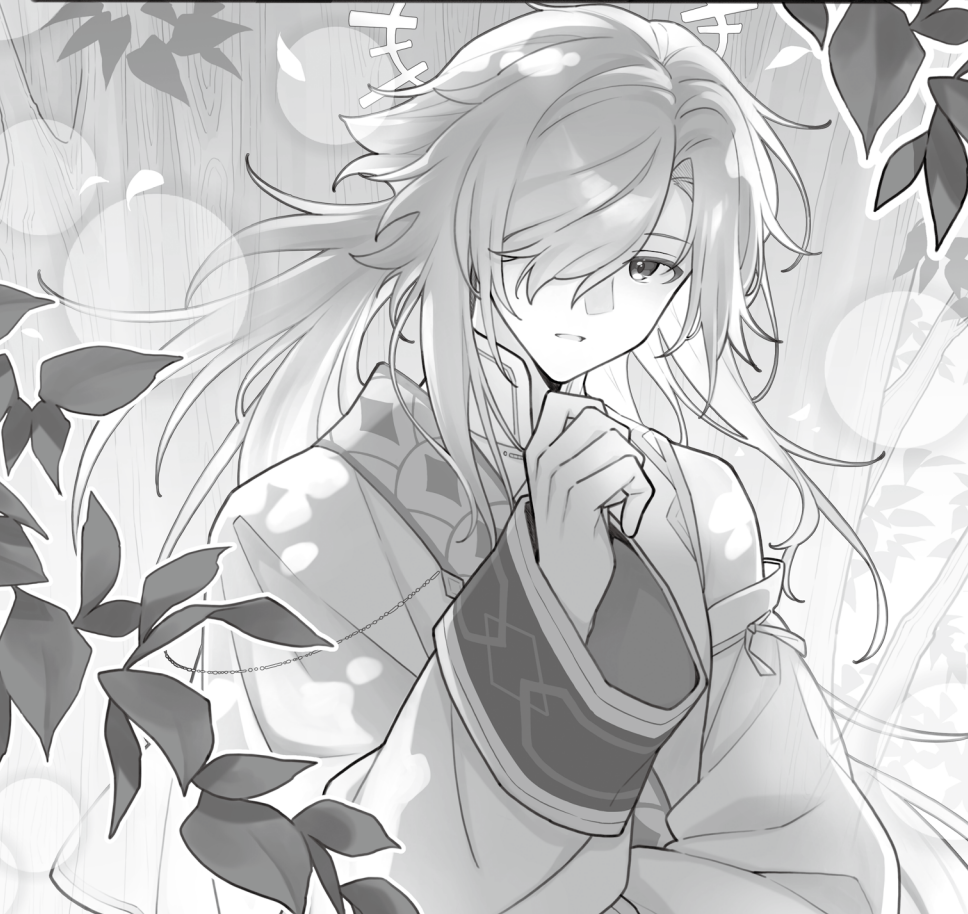


「よし！ きょう、ここをおれのぼしよにするぞ！」

俺は意気揚々と腕を組んで宣言した。

丁度微かに光を発している大きな木の根元が空いていたので、夜も怖くないだろう。

あとちよつとで日が沈みそうだからテントを張るのは後回しにして、食べ物を探すことにした。



「これは……おいしくないやつ……あ、これはよきそーなやつだ」

魔導書^{グリモア}を手に、目に入った植物達を調べながら近くを散策していると、中々美味しそうなキノコがあった。

……魔導書^{グリモア}が毒茸^{どくたけ}だつて教えてくれなければ、食べてたかもしれないけど。

結局俺は美味しく食べられるキノコや果実を厳選して採る^{とと}が、少ししか集まらない。

少しガツカリしたけれど、そういえば俺ちっちゃいんだつて思い出した。

高校生のときなら足りないけど、今の俺なら十分だな。

そう思いながら俺が木の根元に戻ると、人影が見えた。

「あ……だれ？」

ポツリと呟いた俺の声が聞こえたのか、木の根元にいたその人は振り返った。

「つ……すごい！」

その人の身体は薄っすらと透き通っていて、顔の造形は見たことがないくらいに美しかった。

銀色の髪に、黒と青が交ざった、見ていると吸い込まれるような瞳。体つきや骨格で男の人だつ

て分かるけど、顔が凄すぎて、人間を超越した雰囲気^{雰囲気}を醸し出している。

……そもそも透けてるし、人間じゃないのか。

「君は……」

「すけすけだ……」

透けてる男の人が口を開くと同時に俺も喋ってしまった。

……なんか気まずい。

どちらとも口を噤んでいると最初に男の人が喋りかけてきた。

「……君は人間だよね」

……何当たり前のことを聞いてくるんだ？

俺がうんと頷くと、男の人は何やらぶつぶつ言い始めた。

「どういふことだ？　ここは人間は立ち入ることができない聖域なのに。……この子に人族の血が流れているのは明らかだな。けれど完全に人族でもない……」

「あ、あのー」

ぶつぶつ言ってる男の人に俺は勇気を振り絞って話しかけた。

ぱつと顔を上げた男の人に、「きれいな人だなー」なんて思いながら話し始める。

「えっと……その……ここ、おれ、きよてんにしたので、テントたてるから……ちよつとどいてください……」

「え？　あ……そうか。ごめんね。今から退くから」

男の人はハツとしたようにそう言うと、空中移動しながら隣の木の傍に行った。

「君はどうしてここにいるんだい？」

え……いや、どうしてって言われても……

「ここにてんい、させられたから？」

俺がうーんと考えながら答えると、男の人は驚いたように僅かに目を見開いた。

「誰に送られたんだ？」

「えーと……かみさまだけど、たしか……あ！　じくーのかみさまだ！」

「神様……？　じゃあ時空っていうのはその神様が司っているということかな？」

ウンウンと俺が満面の笑みで頷くと、暫く黙り込んでいた男の人は納得したように微笑んだ。

「……そうなんだ。君は異世界から来た子供なんだね。僕は精霊王。これからよろしくね。一応時

空間を司る精霊だよ」

……異世界に着いて早々こんな凄い人と鉢合わせするとは思わなかった。

「おれは……え、えっと……いせかいからきました」

ちよつと囁んじやったけど、我ながら上々の出来だな。

よろしくとお互い挨拶をしたあとに、俺はテントを出した。

魔導書を開いて使い方を見ると……

①建てたい場所に投げる。

②片付けるときには収納と唱える。

これで終わりだった。
凄く便利……便利すぎない？

試しに俺が木の根元のところに投げてみると、ポンッと音がして一瞬でテントができた。
次にボックスと唱えると、テントは少し浮いてシュパッと元の形に戻った。

これなら片付けも簡単だなー、なんて思いながら中に入ると、内側はもっと凄かった。

うん、ベッドと椅子に机、あと床全面にフカフカの絨毯が敷かれていた。

これ絶対に普通のテントじゃないでしょ。

一つ一つ魔導書で調べていくと、椅子や机を増やしたいときは、魔力を消費することでできるんだとか。

……俺の持ち物は魔力を使うやつが多いから、早めに魔力の取り扱いを覚えなといけないな。

明日魔導書で魔力の使い方方を調べちゃうかなー、なんて考えながら外に出ると、すでに日は沈み夜空に星が輝いていた。

「……どうだった？」

何やら興味津々で声をかけてきた精霊王さんに凄かったと答えると、彼は目を輝かせた。

「僕も中に入れてもらってもいいかな？」

俺がいいよと答えると、精霊王さんはもの凄い速さでテントの中に入っていく。

……これって珍しいのかな？

精霊王さんがそんなに気になるほどなのかと思いつつ、俺は採ってきた果実を食べ始めたのだった。

第二話 君の名前

「……おお！ 美味しいな！」

拳大の果実に齧り付くと口の中に甘い果汁が広がった。

果物特有のサツパリとした甘みにシャキシャキの食感のままにリンゴのようで、俺は夢中になつてパクパクと食べていく。

いつの間にか食べ終わっていた俺は次の木の実に手を伸ばす。

今の俺にキノコを生で食べる勇気はないので、キノコは一旦置いておく。

今度は小さな粒が沢山ついたブドウのような果物だ。実の色は輝くような赤色でとても美味しそうな雰囲気を感じさせている。

「ふむ。これはきたいできるときがしゅる……するぞー！」

期待してちよつと噛んでしまったが、誰も聞いていないし大丈夫だ。

ひと粒取って口の中に入れると、今度は瑞々しい果汁が口いっぱい広がった。

……美味しい。美味すぎるぞ！

俺の好みにドストライクなこの果物に俺は懸命に口を動かした。

そしてパクパクと食べて完食した頃にはお腹いっぱいになっていて、ゴロンと仰向けに寝転んだ。涼しい風が俺の頬を優しく撫でる。

「ふうー。たべたたべた。あのあかいのはすごいおいしかったな。あしたもとりにいこーっと」

またあれが食べたいと願望を膨らませていると、テントを見終わったのか出てきた精霊王さんがニコニコ笑顔で俺の顔を覗き込んできた。

「あれは……もしや神がお作りになったものか？」

そして何故か恐る恐る問いかけてきた精霊王さんに、俺は「そうだよー」と頷く。

すると精霊王さんは驚愕した顔で俺を見つめてきた。

……あれ？ そんなに驚くこと？

精霊王さんには神様のことを話してあるし別にそんなに驚くことでもないのでは……と思っていると、精霊王さんが何やら真剣な顔をして俺に話しかけてきた。

「……君、僕と契約しないかい？」

「え……？」

俺が啞然としていると精霊王さんは積極的な売り込みを始めた。

「……ほら、僕は一応精霊王で、精霊の中では一番強いよ。それに僕と契約することによって繋が

りができ、君の危機に駆けつけることができる。それに……あ、もし契約できたら精霊の秘伝の宝を譲ってあげる。どう？ 契約しない？」

……いや、そんなに怒涛のように喋られても困ります。

それに俺を物で釣れると思っているのはおかしいぞ！ 俺は物で釣られるほどお子様ではな

い……

「あの赤色の果物が群生している場所を僕は知っているし、他にもこの森に何があるのかも知ってる……どうする？」

……あのブドウもどきが沢山……

「ふむ、よくかんがえたら、けいやくしてもいいようなきがしてきたな。うーん……おれ、やさしいから、けいやくしてやつてもいいぞ！」

気づいたらそんな言葉が俺の口から滑り出していた。

別に実に釣られたわけじゃない。違うはずだ。ただ検討してみた結果、俺は契約したほうがいと感じたのだ……そうに決まってる。

俺が「いいぞ！」と言った瞬間、精霊王さんはぱつと顔を輝かせて、けれどすぐに緊張した顔になった。

「……じゃあ、始めるよ」

その言葉に俺が分かったと頷くと、精霊王さんはもの凄く緊張した様子で説明し始めた。

「君が僕に名付けをしてくれれば良いよ。あとは僕がやっつくから」
……んー？ 意外と簡単だな。

「わかった！ じゃあどんななまえがいい？」

「あ……それは君が自由に決めてくれて良いよ。あまり変な名前じゃなければなんでも……」
うーん、承知した。

それから俺は暫く考えたけど何も浮かばずにいた。名前を付けるって案外難しいな。

「なあ、せーれーおうさんは、どんなせーれーなんだ？」

「うん？ ああ、さっき言ったように僕は時空の精霊だよ」

フムフム、時空の精霊なのか……そういえば俺が会った神様もおんなじようなの司ってたのかなとか……たしか名前は……

「よし！ せーれーおうさんのなまえがきまったぞ！」

ぴよんぴよん飛びながら俺がビシツと言うと、精霊王さんは興味津々で耳を傾けた。

「せーれーおうさんのなまえは……クロス。かみさまからとつて、なまえをきめさせてもらったぞ！ どうだ！ かつこいいだろ！」

俺が高らかに精霊王さんの名前を叫んだ途端、俺と精霊王さんを囲むように多数の魔法陣らしきものが出現した。

「……凄い。まさか本当に成功するなんて……つ、僕の名は……クロス。時空精霊だ」

何やら感動した表情で、途切れ途切れに言葉を紡ぐ精霊王さん……クロスさんを見て、俺まで涙が出てきた。

……これは違う。悲しいから泣いてるんじゃないくて、子供あるのもらい泣きというやつだ。

俺が心のなかで言い訳しながらグズグズと泣いていると、クロスさんが突然俺の頬を伝っている涙をやさしく拭った。

「ありがとう主。僕の願いが叶ったよ。主の名前を覚えてくれるかい？」

「ふ……ぐずつ……おれはダイキだ」

「ダイキ。改めて僕の願いを叶えてくれてありがとう。僕のことこれからクロスと呼んでね」
精霊王クロスと俺は熱い握手を交わした。



【クロスSIDE】

僕は人間達が言うところの、神話時代に生まれた。

創世神話の神々は僕達精霊を誕生させたことにより、世界から距離を置くことにしたらしい。

世界管理の代理人である僕達がいるからもう大丈夫だとも思ったのか……どちらにせよ、精霊である僕は神を一度も見ることがない。

精霊には沢山の種類がある。

中でも原初の七属性に分類される精霊達は強い力を持ち、精霊界の実権を握っていた。そして、水や火、それに土などの精霊は、各代表がその種族を統治した。

僕は時空を司る精霊だ。七属性の中でも突出した実力を誇っていたが、僕には同族がいなかった。千年ほど時空を司る精霊を探して世界を放浪したけれど、流石に千年も経つと僕でも分かる。

……ああ、同族はいないんだ。

それから僕は精霊達の住処である神秘の森に閉じ籠もった。

他の精霊達が楽しそうにじゃれ合っている様子を見ては、僕も仲間に入りたいと羨む日々。

そもそも、僕は他の精霊達から恐れられていた。あまりにも強い力を持っているからだ。

僕に立ち向かえる精霊は、各種族の代表達くらい。

時が過ぎ、僕はいつの間にか精霊達から王と敬われるようになった。

何百年も閉じ籠もっていた僕の噂は、いつの間にか精霊達の間で広まっていたらしい。

かといって何かが変わるわけでもないの、いつものようにぼーっと過ごしていたある日。

火の最上位精霊のフレイと水の最上位精霊のアクアが面白い話を持ってやってきた。

属性で考えると相性が悪そうな二人だけど、精霊達の間では仲が良いことで有名だ。

他の精霊達が「二人が真の支配者だ」とコソコソ話していたのを聞いたことがある。

そんな二人が僕に用があるなんて珍しい。

「精霊王。私達と一緒に人間の街へ行きませんか？」

「何故行かないといけないんだ。面白くないし、行く意味がない」

フレイの誘いに僕は行かないと返事をしたけれど、アクアの一言で固まってしまった。

「人間の中には精霊と契約できる稀な者がいるんですって。精霊と契約した人間とは固い繋がりができて魔力や体質が変化する場合もあるらしいんですよ。そして何より契約した精霊達が……」

「精霊達が？」

僕が食い気味に問いかけると、驚いたのか目を見開いたアクアが答えた。

「それが……とつても幸せそうなんですって。契約した精霊は、他の精霊達が羨むほど毎日が楽しそうで……まるで本当の家族ができたみたいだと……」

「……やっぱり僕、行くことにするよ」

僕が随分と永い間願っていたことが、まさか人間達によって叶えられるかもしれないなんて……

青天の霹靂だった。

僕はアクアとフレイとともに、少しの期待を乗せて人間の街へ行った。

家族のような存在……ついに僕にもできるかもしれない。

僕達は人間の街に着いたと同時に契約できる人間を探し始めた。

しかし現実には甘くない。

アクアやフレイ、ましてや僕に見合う器を持った人間はいない。仮にいたとしてもその人の心が美しくなければ契約したいとは思わない。

結局アクアとフレイに合う人間はいなくて、二人は早々に帰っていった。

それでも僕は諦めなかった。

何千年も家族のような存在を願っていた僕はまた世界を放浪し始めた。

何年も何年も探して……大賢者や聖女、聖騎士にも契約を求めた。そして、彼らは快く応えてくれた。

けれど契約することができない。

原因は明らかで、僕の力が強大すぎるためだった。

精霊と契約すると、人間も契約した精霊の力を一部行使することができる。

だから、人間は契約する精霊の力を扱えるほどの器を持っていないなければならない。

聖女や聖騎士はまさに器でいえば世界最高レベルなはず。

けれど、その人達をもつてしても僕と契約することはできなかった。

これで最後にすると決意して僕が契約を持ちかけた相手は神子^{かみこ}。

神に愛されている人間なら僕とも契約できるかもと期待した。

しかし結果は惨敗。僕に名を付けることができなかった。

そのときからだろうか。無気力になって、全てのことかどうでも良くなってしまった。

また神秘の森に閉じ籠もった僕をアクアやフレイは心配したけれど、僕はもう努力する気が起らなかった。

それから何年経つただろうか。僕はふと外に目を向けた。いつものように色々な精霊がいる光景を僕は何故か美しく感じてしまった。

そして夕方、久方ぶりに外に出た僕は森を歩き始めた。

久しぶりの外の光景を珍しいと感じながら歩いていると、微かに光る大きな木の根元に着いた。

これは……世界樹^{ワールドツリー}じゃないか。

創世神話の時代に消えたときされる膨大な魔力を秘めたこの木があることに僕は首を傾げた。

それに気づかなかったのもおかしい。これくらいの魔力なら一瞬で感知できるはずなのに。

僕がボーッと目の前の大樹を眺めていると、突如後ろから声がした。

振り返るとまさかの人間。

しかもあの聖女や神子を遥かに上回る魔力量に僕は驚愕した。

……これはもはや人間の域を越えている。

「君は……」

「すけすけだ……」

僕が口を開くと同時にあの子が喋った。なんか謎の緊張感が漂ってきて僕は面白く感じてしまった。

精霊王である僕を「すけすけ」なんて言えるこの子を僕はひと目で気に入った。

神様にここに連れてこられたと言っていたので神子のようなものかもしれない。

これからここに簡易住居を建てると言ったこの子は、その小さな手で腰袋をゴソゴソやって正方形の小さな箱みたいな物を取り出した。

ホイと投げると一瞬で組み立ったその道具に僕は興味が湧いた。

少しして住居からこの子が出てきたので、入れてほしいとお願ひして中に入ると、強烈な神の気配がした。

強烈と感じてしまうほどの気配に呆然ぼうぜんとしながら外に出て、この子にあれば神の物か問いかけた。当然のように頷く子供に驚愕した僕は、どうかしていたのかもかもしれない。

とうの昔に消えた願ひが再燃し、この子に契約を持ちかけた。

最初は渋っていたけれど、食べ物を持ち出すと目を輝かせて許可してくれた。

……凄くチョロ可愛い子だな。

僕が名前を付けてとお願ひすると、この子は名前を言っただけで契約を成立させてしまった。

魔法陣や祝詞のりとのための準備をしないとイケないのに全てをすっ飛ばしたこの子に、僕はまたしても驚愕すると同時に胸に熱いものがぐつとこみあげてきた。

「……凄い。まさか本当に成功するなんて……っ、僕の名は……クロス。時空精霊クロスだ」

僕が泣きそうになると、この子ももらい泣きし始めた。

「ありがとう主。僕の願ひが叶ったよ。主の名前を覚えてくれるかい？」

「ふ……ぐずっ……おれはダイキだ」

改めて問いかけた僕は、この子を一生忘れないだろう。

初めての家族。

そして僕の世界が色付き始めた。



「なーなー、クロスはどこからきたんだ？」

あのとすっかり打ち解けていた俺——ダイキはクロスを質問攻めにした。クロスは俺の質問に微笑みながら優しく答えてくれる。なんて優しい精霊さんなんだ。

「ああ、今の住処のこと？ ……それなら僕はここ神秘の森に住んでるよ。もうちょっと行けば精霊の都があるから明日連れてってあげるね」

どうやらここは神秘の森というらしい。それに精霊さん達も沢山いるそうだ。

他の精霊さん達にも早く会ってみたいなーなんて考えていると、クロスが話しかけてきた。

「今度は僕から質問があるんだけど、どうやって名付けだけで契約を成立させたのか、教えてほしいんだ」

いや……そんなこと言われても……

「クロスがじゅんびしてくれてたんじゃないのか？」

俺が問いかけるとクロスは驚いたように首を横に振った。

「違うよ。契約ってそんなすぐに準備できるものじゃないんだ。僕でも準備に時間くらいかかる……ほら、あの時は出会って一時間も経っていなかったじゃないか」

ふむ。そう言われても、俺がなんでそんなことできたのかよく分かんないな。

俺が「知らないな」と言うと、その答えを想定していたのかあまり驚いていなかった。

「そうだよ。流石にダイキがそんなことできるわけ……あんなにチヨロ可愛いのにできるわけがないな。じゃあやっぱり神が絡んでいるのか？　ダイキは神から物を授けられるほど愛されているわけだし……」

何やらボソボソ呟いていたけど、納得したのか一人で満足げな顔をしている。

「じゃあおれそろそろねるから……あ、クロスもおれとっしょにねるか？」

俺はもう寝ようとクロスも誘ったけど、クロスは首を横に振った。

「僕達精霊は魔力さえ摂取すれば生きられるんだよ。意図的に食べたり寝たりはできるけど……まあとにかく僕は寝る必要はないんだ。……それに僕はこのあとやることがあるんだよ」

そうなのか。俺はクロスに行つてらっしょいと声をかけてからテントに入った。

ベッドに寝転ぶと、若返つて肉体年齢が幼くなった影響なのかすぐに瞼が重くなる。

翌朝、気持ち良く目覚めた俺がテントの外に出てみると、まだクロスは戻ってきていなかった。

いつ帰ってくるかなと暫く待っていたけれど、いつまでも帰つてこない予感があった俺はクロスを

捜しに行った。

「いないな……クロス、どこにいったんだろう……」

俺は森の中を歩きながらぼやくけど、勿論返事なんてない。

最初はてくてく歩いていていたけど、少しずつ足が進まなくなってきた。

俺、まだ朝ご飯を食べてないぞ。

俺のお腹がグーグー合唱を始めたので食べ物を探すけど、見つかったのは昨日のリンゴみたいな果実が一個だけ。

仕方なく俺はその果実をもぐもぐと食べて少し機嫌を直し、また出発した。

歩く。歩く。歩く。

随分と歩いているけれど一向に見つからないので俺は段々不安になってくる。

それでも歩いていくと運が悪かったのか小石に躓いて俺は転んでしまった。

……痛いな。

見ると膝と手を擦りむいていて、俺は涙目になった。

……まさか俺、見捨てられたのかも。

俺がその場にしゃがみこみ泣いていると、ふと上から声がした。

「ねえあなた。大丈夫？」

俺は顔を上げると綺麗な水色の髪と目をした女の人が俺を心配した顔で覗き込んでいた。

「あなたもしかして……人族？ そんなに泣いちゃってどうしたの？」

「おい。俺を置いていくなつて、アクア。まったく……ん？ お前、泣いてんのか？」

さらに陰から濃い青色の髪と黒目の男の人が現れた。

そして二人とも体が薄っすらと透けている。

俺は突然現れた謎の人物達に驚いて涙が止まる。

「な、ないてないぞ！ おれは……ちよつともりでまよっちゃったから……きゅうけいしよう
と……」

段々声が小さくなつていくにつれて、俺は自信がなくなってきた。

「なんだよお前、誰から見ても泣いてるつて分かるのに誤魔化そうとしてるのか？ 凄い格好悪

い……グフツ！」

「あらあらごめんなさいね。こいつ頭が悪いから、言っていないことといけないことの区別がつかなくて困っているのよ。あなたの名前を教えてくださいな？」

何か言いかけた男の人の腹に鉄拳を食らわせた女の人は、俺に優しく声をかけてくれた。

「お、おれはダイキです。……えつと、よろしくおねがひします」

嘸んでしまったのは、ちっちゃくなつてしまったからだ。仕方ない。うん、そうに決まってる。

顔を赤くした俺が心のなかで言い訳をしていると、突然女の人がよるめいた。

どうした！ と慌てて駆け寄ると女の人は胸を押さえながらも復活した。

「……ダイキつて言うのね。私は水属性^{アクア}最上位。これは名前じゃなくて称号のようなものだから気軽にアクアと呼んでちょうだい。……何この子めっちゃ可愛いんだけど」

最後なんかボソボソ言っていたけどよく聞こえなかったな。

「俺は閻属性^ク最上位。これもアクアとおんなじ称号のようなものだ。お前、迷ってるんだな。なんでここにいるんだ？」

「お、おれ……クロスと、せいれいさんたちのとこにいくやくそく、してただけど……クロス、かえつてこないからさがしてたんだ」

クロウという精霊さんに問いかけられた俺がそう答えると、二人は顔を見合わせた。

「え……？ もしかして、精霊と契約しているの？」

「いや……流石に精霊の都に連れてくるなんてことはしないはず。そういえば精霊王が連れてきた人がいるとかなんとか言つてた気がするな」

「……もしかしてこの子のことかしら。どうやって精霊王と知り合ったのかは分からないけど、もし本当だったらあの人が気に入っていることは確かだね」

二人が話している言葉に精霊王が出てきたので俺は驚いた。

まさかクロスが精霊さん達のところに行つていたなんて。……やつぱり俺を置いていくつもりだつたんだな。

約束したのに!! と俺がプンプン怒っていると、アクアという精霊さんがゆっくりと口を開いた。

「……じゃあ、とりあえず精霊王のところに行つて、そのあとあなたの契約精霊……クロスと言つた……まあとにかくそのクロスとかいう精霊を探すわよ！」

「い、いいの？」

どうやらこの二人が俺をクロスのところに連れていってくれるらしい。俺は嬉しくてつい本当か聞いてしまった。

「勿論いいに決まってるでしょ！　だめなんて言う奴がいたら私が……フフフこんな可愛い子を傷付けようもんなら……殺る」

「うん。まあ精霊と契約している人間なら連れてきてもいいだろう。それに……今のお前は世界一安全だから安心しろ」

上品に微笑んでいるアクアさんと、そのアクアさんをチラチラ見ながら少しばかり汗を垂らしているクロウさん。

「アクアさん。クロウさん。ありがとう!!」

俺が満面の笑みでお礼を言うと二人は少しよろけた。

そして、急にやる気が出たのかクロウさんが俺を引っ掴んで……影に入った。

「は……？　え？　なに？」

俺がとてつもなくあわあわしている、俺の様子に気づいたクロウさんが俺の頭を撫でた。

「ここは影世界だ。時空世界と同じ四次元空間に存在していて、距離という概念がないんだよ……ん、まあ簡単に言えばどこにでもすぐに、そして簡単に行けますよってことだ」

俺が意味分からんって顔をしていたら、クロウさんが分かりやすく教えてくれた。

「あと俺のことはクロウでいいぞ。さん付けされると照れるからな」

「うん。わかった……クロウ。よろしくね」

はにかみながら言うと、クロウは優しく俺と手を繋いで歩き始めた。

そのまま五分ほどでてくてく歩いていると、突然クロウが立ち止まった。

「着いたぞ」

クロウはそう言って指先から魔法陣みたいな格好良いやつを出して何か呟く。

突如目の前が白く光って俺は草原に立っていた。

すぐ傍に湖があつて綺麗な花も咲いているこの場所は絶景だ。

「う、うあー！　とつてもきれー!!　すごいー！」

興奮してクロウの服の裾を引っ張っていると、向こうからアクアさんがやってきた。

「やっぱりあなたの影世界って便利よねー。私も使えるようにならないかしら」

「使えてたまるか。水属性の精霊が闇魔法を使えたら俺達の存在意義がなくなるわ」

アクアさんとクロウが言い合いを始めようとしたので俺はなんとかしようと思いを開いた。

「アクアさん！　クロウ、メチャすごいよ！　なんかゆびからまほうじん、だしててかつこよかつ

た！ おれもあれやってみたい！」

思い出したらまた興奮してきた俺は、アクアさんにクロウが格好良いことを一生懸命伝えた。

「ああ、魔法陣？ アレなら私も出せるから別に凄くもなんともないわよ。そんなことより……私
のことはアクアでいいわよダイキ」

「あ……おねがいます。アクア」

どうやらあの魔法陣は別に凄くもなんともなかったらしいです。そんなことを考えていると、ク
ロウが突然俺を抱き上げた。

「あ……!?」

「お前の足じゃ時間がかかるから急いで行くぞ。アクア。念のために周りを頼んだ」

「言われなくても分かっているわ。とりあえずちよっかい出してきた奴らは潰すから」

なにやらアクアがよろしくないことを口走っていた気がするけど、次の瞬間クロウが走り始めた
せいで俺の頭は真っ白になった。

速すぎて声も出せない俺は、いつの間にか大きな門の前にいた。

「ここから先が精霊の都の中心部、精霊街だ」

きらびやかな意匠いしやうの門の前でクロウが言った。

「すごいおーきい！」

俺がワクワクしていることに気づいたのか、アクアが俺と手を繋いだ。

「準備は良い？」

クロウが門を開けた。

「すごい!! たくさんせーれーさんがいる!!」

クロウが扉を開けた先には、色々な姿の精霊さん達が歩いたり飛び交ったりして、とても活
気のある雰囲気を感じられる。

それに建物や道など全てが木や石できていて、まるでお伽話とげばなしの世界に入ってきたようだった。

「ここは沢山の精霊が集まる都の一つ。精霊は魔力が綺麗で沢山ある場所を好むから、必然的に集
団で生活するようになってるの。それにしても、こんなに喜んでくれるなんて嬉しいわ」

ピョンピョンとジャンプしながら興奮している俺の頭を撫でながらアクアがそう言ったので、俺
は我に返って恥ずかしくなった。

現役の高校生がこんな姿を晒さらすなんて、絶対にだめなやつだ。

「そ、その……さっきのはすこしおどろいただけだから……そうだからな！」

慌てて俺はそう主張するけれど、アクアもクロウも「そうだねー」と言ってお聞き耳を持ってくれ
ない。

「ほら、そんなことより契約精霊を捜しに来たんだろ。俺達が見つけてやるから……だからそんな
に拗こねるなって」

「そうよそうよ。こんなにおへソ曲げちゃって。とつてもかわ……怖いわ。機嫌直して？」
 そう言って二人が俺にお願いしてくる。俺は最初から拗ねてないし、立派な大人なので別にいいよと伝えてあげた。

「じゃあ精霊王のところへ行きましようか」

何故か二人と手を繋いで歩き始める。

沢山の精霊達がいるこの風景は不思議で、歩きながら首をブンブン振っていたら、周りの精霊さん達に変な目で見始めた。

俺の行動を不思議に思っているらしい。確かに、道を通り過ぎる際に知らない人がキョロキョロしていたら不思議に思うだろう。

しかし、普段は冷静でクールな俺がキョロキョロしてしまうほど凄い光景なのだ。こればかりは仕方がない。

そうやって周りの景色を存分に堪能しながら着いたところは、歴史の教科書に出てくるような真つ白なお城だった。

「ほら、ここに精霊王がいるわ。あなたの契約精霊について何か知っているかもしれないから一応会いに行くけど、ダイキも行く？」

「……おれ、やっぱりいいや」

聡明な俺には分かる。ここは凄い人達が住んでいるやつだ。つまり、少し無礼なことでもしたら

首が飛ぶかもしれない。

中学で習った歴史なんて、何かが起こるたびに人が首チョンパされてたんだ。別に怖くないけど死ぬのは嫌だからね。別に怖くないけど。

「ふたりでいつてきていいよ。おれ、ここであやしいひと、こないかみてる」

俺は胸を張ってそう言い放ち、扉を背を向け仁王立ちになるが、即座にアクアに抱き上げられた。「何言ってるのよ。あなたが行かなくて誰が行くの？ ほら、そんなに躊躇ためらってないで出発よ！」

ズカズカとお城の中に入っていくアクアに、俺は降ろしてと訴えながらバタバタするが、全くと言つていいほど効果がない。てゆうか気づいてさえくれない。

「精霊王！ 少しお話があります！」

そして奥のほうに進むと扉に手をかけ、豪快に開け放ったアクアは大きな声で中にいる人達にビシツと言いつつ放った。

「ん？ 僕は今忙しいからあとにしてくれないか。こいつらの対応で面倒くさいことになっ……た

ん……だ……!?」

「クロスー！」

俺は部屋の中にいたクロスを見つけた途端、アクアの腕の中からピョンと飛び降りて走り出した。「なにやってたんだよ！ おれをおいてきぼりにして……とつてもさびし……しんばいしたんだぞ!!」

クロスに駆け寄り腰辺りを本気で殴っていると、クロスが俺の頭をナデナデしながらご機嫌取りをしてくる。

「うんうん。僕も凄い会いたかった。でも、こいつらが『人間ごときがこの街に入るなんぞ言語道断!』とか言っていたから遅れちゃったんだよ。ごめんね。あと……あー、そうだ! なんか腰が殴られていたくなってきちゃった!。やっぱりダイキって強いねー!」

どうやら本当に反省してるらしい。俺の強い殴りに耐えられなくなって、心から反省しているに違いない。

それにしても、俺がこんなにクロスを痛いと言わせられるほど凄いだなんて……異世界だからだろうか。

どうやら俺には戦闘の才能が眠っているのかもしれない!

俺が自分の才能について思いを馳せている間にも話し合いは続いていた。

「に、人間じゃないか! アクア様! 何故ここに連れてきたのですか!」

「はあ? ここに連れてきちゃいけないとでも言うわけ?」

「勿論そうに決まっているではないですか! 下賤な人間を我ら精霊の都に入れるなど間違っております! 今すぐ追いつくべきです!」

俺を指差してそう叫ぶ精霊さんが怖くなり、俺はクロスの後ろに隠れた。

「大丈夫だよ主。追いつくなんてこと僕が許さないからね。それに……僕の主を怖がらせるなん

て……死にたいのかな?」

あ、なんかクロスからヒヤヒヤする怖いものが出ている気がする。

俺はササッとクロスから離れようと、クロスの服の裾を掴んでいた手を離したら即座に掴まれた。

「主はここから離れないでね。こいつらが何をするか分かったもんじゃありませんから!」

そう穏やかな声で言いながらクロスは、掌を騒ぐ精霊さん達に向ける。そして多数の綺麗な魔法陣が形成された。

「お前達は邪魔だし、主に手を出すかもしれない不穏分子なんて必要ないんだよ。だから……消えてくれるね?」

あ……クロスが本気で怒ってる。

俺はクロスと手を繋ぎながらもアワアワして冷や汗をかいた。

「君達はこれから何をやらかすか分かったものじゃないからね。遠くに行ってもらおうよ!」

クロスがパチンと指を鳴らすと、魔法陣が光り輝き突然精霊さん達の姿が消えた。

もしや……これは転移というやつか。俺も使えるようになりたい!!

俺が目キラキラさせながら凄い凄いと連呼していると、クロスにギュッと抱きしめられた。

「会いたかったよ主。凄い会いたかった。あんな邪魔者達がいなければすぐに連れてこれたのに、ほんとにごめんね。これからはずっと一緒にいようね!」

寂しそうな表情でそう必死に伝えてくるクロスの頭を、大人な俺はよしよししてあげた。

立ち読みサンプル
はここまで

弱音を吐いて少しでも楽になればそれでいい。クールな俺がそれまでついてあげておけるからな。そう思いながら俺がよしよししてあげている姿を、周りは何故か口を押さえて見ている。

「なあ、なんでクロウたちは、くちをおさえているんだ？ きもちわるいのか？」

あまりにも目立っていたため俺が心配そうに声をかけると、何故かもつと気持ち悪そうに口を押さえ、そしてお腹も押さえ、何かを堪えている。

もしや……下痢か!?

うん。分かるぞ。確かに夏お腹を出して寝た日は、起きたときにお腹が冷えたりで下痢になってしまうことがあった。

まだ子供だった俺は凄く辛かったことを覚えている。

「だいいじぶか？ トイレいくか？」

ここで耐えられなくなつて出してしまつては大変だ。

俺がトイレに行ったほうがいいぞと親切に教えてやると、クロウ達がついに堪えられなくなったように爆笑し始めた。

「ハハハッ、なんかもう……ダイキつて凄く面白いわね」

「精一杯大人感出してよしよししてあげてるとか……そんなどこもめっちゃ可愛いしな」

……なんか笑いにされた。

そして、クロウは俺のことを可愛いなんて言いやがった。許せん!!

俺には元々培ってきた立派な精神と、異世界に来たことにより手に入れた強い拳があるんだぞ！それを可愛いの一語で……!!

「ふん！ もうクロウなんかきらいだ!!」

俺がそう叫ぶとクロウはショックを受けた顔をし、それをアクアがニヤニヤして眺めていた。

「主。あんな奴のこと気にしなくていいよ。可愛いなんて酷いよね。主はとつてもかわ……格好良い立派な大人なのにね」

やっぱり俺の頼もしい仲間はクロスだ。持つべきは契約精霊だな！

契約したからかもしれないが俺の凄さが分かるのだろう。

「やっぱりクロスは、かっこいいーおれをしっているからな!! かわいいなんておもわないんだよ。おれはかっこいいーからな!!」

腕を組んで俺がそう叫ぶと、俺のほつぺをムニムニしながらクロスがうんうんと頷いてくれる。

「そうだそうだ。主の格好良さはこれから一緒にここで暮らすんだから分かるはずだ。よく見ておけよ」

そう。俺のことは知っていたりよく見たりすればそんなこと言えな……あれ？

「……いっしょにくらす？」

何故か俺がここで暮らすことが決まっていたのだった。